

(別紙2)

## 審査の結果の要旨

氏名 相樂 悠太

相樂氏が研究対象とするイブン・アラビー（1240 年没）はスーフィズム（イスラーム神秘主義）史上最大の思想家であり、20 世紀後半以降多くの研究書、研究論文が刊行されてきた。1980 年代以降になると彼の思想を継承する存在一性論学派への関心が高まり、イブン・アラビーは同学派の祖として位置づけられてきた。しかしその一方で、13 世紀以前のスーフィズム思想史、イスラーム哲学史の延長上にイブン・アラビー思想を位置づけようとする研究は数少なく、彼と前時代のスーフィー思想家、哲学者との関係については充分には分かっているわけではない。近年、B. Abrahamov（2014）などこの問題を克服しようとする研究が現れ始めており、相樂氏の研究もその一翼を担っていると言える。

相樂氏が注目したのは、先行研究においては仔細に論じられることが少なかったイブン・アラビーの靈魂論である。スーフィー思想家たちは、靈魂論を構成するナフス（魂）、カルブ（心）、ルーフ（霊）といった専門用語を詳細に論じ、しばしばそれぞれの上下関係を論じてきた。しかし、これまでのイブン・アラビー研究においては、これらの専門用語がその違いをあまり考慮されることなく扱われがちであり、それぞれの語が彼の思想の中でどのような役割を果たしているのかが分析されることは稀であった。相樂氏は本論の第 1 章から第 4 章までを上記三つの語およびアクル（理性）という四つの専門用語に割り当て、イブン・アラビーが先行する思想家のそれらの語に関する解釈をどのように継承したのか、どのような点で変容させたのかを丹念に分析していく。その上で第 5 章では個々の語の関わりや上下関係が論じられる。個々の語に関する分析は、これまで必ずしも充分に分かっていたわけではない靈魂論の諸相を明らかにしただけでなく、これらの語と顕現（タジャッリー）論や新創造論との関わりを示すことによって、認識主体としての修行者が境地に至るプロセスを形而上学的存在論の中に位置づけることに成功している。また、相樂氏が、後世に膨大な数の注釈書が編まれ従来の研究で依拠されることが多かった『叡智の台座』ではなく、大著『マッカ開扉』に基づいて靈魂論に関する分析をおこなったことも注目に値する。コンパクトであるが難解である『叡智の台座』だけを講読するだけでは得られない知見や視点がそれによって獲得されたからである。

審査委員からは『マッカ開扉』内の関連箇所を翻訳する際の誤りや、本論で主に使用した『マッカ開扉』の別版の参照が不十分であった点などについて指摘があった。しかし、それによって個々の靈魂論用語の分析手法の妥当性や分析の結果が変わるわけではなく、イブン・アラビー靈魂論の全体像を明らかにし、靈魂論と形而上学的存在論の関わりを解明した点で、本論はイブン・アラビー研究史に確実に資する労作であったと評価される。よって、審査委員会は本論文が博士（文学）の学位に値するものと判断する。